



で。

「阿呆云やがれ。……お清、懐ろから鯛が顔出してぞ。」

「まア此兒わいな。……ネンネンヨウ……。」

「そら何しやがんね。……大體番頭どんはどうしなかつたのぢや。」

「ウイー。ヒツ。番……番頭はア……こ、これに控えとりますウ……。」

「オ、／＼、良え恰好ぢや。番頭どん。私しやお禮を申上げます。汝はさて／＼頼み甲斐の有るお方ぢやなア。」

「感應えまつせ……。」

「感應え、でかい極道奴。何でも良え、いづれ後日此捌きはキツと附けます。今夜はそこ處ぢやない。倅。倅は何處ぢや。」

「お父つあん、バア……。」

「そら何を仕腐る。……氣樂らしいワイ／＼騒ぎやがつて。コレまあ落ち付いてよう聽けよ。今日も俺しが見舞に往て遣たらな。今迄スヤ／＼眠て居たお花がバツチリ眼を開いて、オ、お父つあん。永々御心配を掛けましたが、今度は妾しもしよ／＼お暇をせねばなりません。種々お世話になり乍ら、御恩返しも致しませす。相濟まぬ事で御座りますが、どうぞ堪忍しとくれやす。それにつけても若旦那は今日もお越しがムりまへんが、よくせき嫌はれた物でムりますなアと、天にも地にもたつた一遍、初めて怨みがましい事云はれた時の俺しの辛さ。こなたはどう思はつしやる。いや／＼嫌ふのどのやない。見舞に來たうて仕舞が無いのやが、感冒をこぢらした熱病で、一寸も身體が動かせんのだと心にもない陸云ふ心苦しき。まあ左様な事も知らずに、病人のひがみから、怨みがましい事云ふて濟みまへなんだ。お父つあんちウて、俺しの皺だらけの手を握りに來る。顔の色が見てる間に變つて來たなあと思ふと……イヒツ……若旦那に……どうぞ宜ろしう……と云ふたが此世の別れ……イヒツ。とうどうお花は……死んだわやい。」

「チ、チ、チ、チ、チンリンリン……。」

「誰ぢやいそんな事吐し腐るのは、さア今夜は叱言處ぢや無い。直ぐ引返してお通夜に往て遣りますぢや。あんな心掛けの良え嫁ぢやで、必ず善え所へは參るぢやらうが、宅に親鸞さんの有難い御姿